

# イースター礼拝

2022年4月17日(日) 午前10時30分

司式 牧師 姜 徑米

前 奏

招 詞 詩編 118編23～25節

讃 詠 147 (1)

主の祈り

聖 書

イザヤ書 35章1～4節 (旧1116)

ルカによる福音書 24章13～35節

(新160)

祈 禱

讃 美 歌 151 (1)

説 教 「復活と再会」 牧師 高橋和人

祈 禱

日本基督教団信仰告白

洗 礼 式

讃 美 歌 199 (1)

聖 餐 式

献 金

頌 栄 540

祝 禱

黙 禱

## 4月の祈り

主の十字架の苦しみと死によって与えられた恵みを受け止め、今も生ける復活の主イエス・キリストと共に生きる喜びと確かさを覚えて。

戦争の痛みに覆われている世界の嘆きを主が聞いてくださるように。

戦火が早く止み、人々の生活が回復されるように。  
弱い立場の人々や子どもたちが守られるように。

## 今日の祈り

主の復活によってもたらされた死に対する勝利と永遠の命への希望の信仰を確かめ、復活の主との出会いによって救われ、その体である聖餐に与る恵みを味わうことができるように。

戦火の地にある子どもたちが守られるように。

田園調布幼稚園が祝福を受け、力づけられ、その使命を果たすことができるように。

## 「復活と再会」

高橋和人

ルカによる福音書 24章13～35節

ルカ福音書は主イエスの復活を出来事によって語る。主の復活は説明には限界がある。しかし、復活の主にであった人々が途絶えることなく、今に至っている。それぞれの仕方でも復活の主に触れることができるからだ。聖書は復活の主に触れる道である。福音書をたどることで、復活の主に触れることができる。

主の十字架の死の三日目の夕方近くエルサレムからエマオに向かうクレオパともう一人の弟子の姿があった。西へ12キロほど、暗い顔をしてうつむき歩いている。彼らは主イエスに期待し、主の十字架の死は希望を打ち砕き、悲しみと傷を残した。主の死、彼らには紛れもない事実であった。

そこに、割り込んできた知らせがあった。早朝に婦人たちが主が葬られた墓で二人の天使たちから

「なぜ生きておられる方を死者の中に探すのか」と、主の復活の告知を受けた。弟子たちはたわ言のように思った。ペトロはそこに行ったが亜麻布しかなかった。

二人の話の中に主の死という事実を揺るがす証言が入り込んできた。彼らはこれまでのことを確かめるように語り合う。

そこに主イエスが近付くが、彼らは気づかない。目が開かれなければならないのだ。主は一緒に歩み、問いかける。「それはどんなことか」と。二人は暗い顔をして立ち止まる。絵画的場面だ。

彼らは主の死の経緯を語る。彼らには待望の救いの実現者メシアであった。しかし、彼らの話はそこにとどまらなかった。婦人たちが復活された主イエスに会ったと言い始め、「主イエスは生きておられる」と「そこにはおられなかった」という二つの証言が彼らを困惑させていた。

主イエスは語り始める。「物分かりが悪く、心が鈍く」と叱責される。そして「メシアは苦しみを受けて、栄光に入るはずであった」と語る。

メシアが徹底的な苦しみを受ける。受難のメシアこそ聖書を開く鍵である。主は苦しみに寄り添われる。それこそが神が聖書を通して語られる御心である。主イエスは聖書全体にわたり、御自分のことについて語られた。

彼らは主イエスを泊まるために引き留め、食事を共にした。それは、かつて人々にパンを分け与えられたときの姿であり、最後の晩餐ついに彼らは食卓でメシアの姿がある。彼らにその方が主イエスであることが見えた。

主イエスとの語らひは、心に燃えるものをもたらした。復活の主は信仰に寄り添い、共におられる。復活の主は、教会と共に今もわれらに寄り添われる。この出来事は今につながっている。